
ナギの涙

主

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ナギの涙

【コード】

N7966K

【作者名】

主

【あらすじ】

ナギ、自分の母の病室にいったが母は、約束を破り。
そのあと、・・・

なんで・・・なんで・・・私は・・・

それは、夏に起きたこと

「きてやったぞ、母」

私の母は、ベッドで寝ていておっとりした顔で、こっちを見ていた。

「もう、ナギその言葉づかいはやめなさい」

「へーい」

私は、なぜ来たのかというところあること言いに来たからだ。

「あ、そういえば母よ」

母は、返答した

「なーにナギ」

本当いつもどおりのおっとり顔だなー

「あの、前に約束した事・・・」

私の話を母は区切って母が続けた。

「ごめんね、ナギちよつと伊豆の旅行一緒にいけないかも、しれないの」

「え・・・」

私は、時間がとまったように思えた。

「どうして・・・どうして・・・どうして・・・だめなの、前までは行く行こうてずっと言っていたじゃん」

母は悪かったという顔で「ごめんね」と謝った。

しかし、私の悲しみや怒りは抑えられなかった。

「母よ、どうしてなのだ、どうしてだめなのだ」

「ごめんねごめんね」

母は、それ以上話そうとはしなかった。

「母なんて嫌いだ!」

私は、病室をダッシュで出て中庭に向かった。

私は、泣いた・悔しいじゃない哀しいんだ。

「母のバカ」

私は、そんなことをつぶやいた時奥からナース服を着たひとが来た。

「ナギちゃん」

「なんなのだ」

私は、何事かと思って聞いた

「お母さんが、なくなっちゃったの」

しかし、私は「冗談だ」と思い。

「ふーん、母にそんな事を仕込まれたのか」

「ナギちゃん違います」

私は、まだ冗談を言っていると思ったが「わかりました、行きますよ」と言っつて母の病室にむかった。

仕方がないと思いながら私は母の病室に入った。

「きてやったぞ」

母は、まだ根に持っているのかわからないが、まー気が代わったんだろつ。

そうすると、後ろから医師が来て「ナギ様、16時30分死亡確認いたします。御冥福を祈ります。」

「は、なにをいってんのお前ら母はそこに寝ているではないか」

私は、そろそろだいたいいらいらし始めてきた。

「ほら、母よ起きろ」と押したが返答がなかった。

え、こんな事はいまままで1度もなかった私が体を触ったらさすがに起きていた母が・・・

「嘘だよ、母は死んでいないよね・・・」

私は、その真実が受け止めきれなかった。

「そつだよ、母は死んでいないよね」

私はさっきの看護婦さんにきいた。そしたら首を横に振ってた。

「ねー母も、芝居はいいよしくて、もう母は」

その時、私は涙があふれてきた

「じょうしてなのだ、まだ私母とたくさん話したかった」

私は続けた。

「まだ、話すこといっぱい、あったのだぞ」

「まだ、バカって言った事謝ってないぞ」

「それなのに、どうして死んじやうの母」

私は、泣き崩れた。私は、一人だ家族がいない本当の一人だ。

「母

」

ナギの涙。 終わり

(後書き)

ちよつとナギの過去について書いてみました。

別の作品もよろしかったら見て下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7966k/>

ナギの涙

2010年10月17日02時02分発行